

様式 (6)

学 位 審 査

学 位 番 号	乙 第 2857 号	氏 名	橋本 忠通
審 査 委 員 会	主 査 教 授	亀岡 信悟	
<p>論文審査の要旨 (400 字以内)</p> <p>論文のタイトルは“4 型胃癌における TS、DPD、TP、OPRT の mRNA の発現と予後”である。【目的】フッ化ピリミジン系抗癌剤は胃癌の中心的薬剤である、その代謝酵素 thymidine synthase (TS)、dihydropyrimidine dehydrogenase (DPD)、thymidine phosphorylase (TP)、orotate phosphoribosyltransferase (OPRT)の発現は治療効果に影響し、予後因子とも報告されている。これまで 4 型胃癌では腫瘍成分が少ないため十分測定できなかったが、Danenberg Tumor Profile (DTP)法を用いて mRNA を測定し、臨床病理学的因子、及び予後との関連性を検討した。【対象と方法】当科で切除した 4 型胃癌手術 62 症例を対象とし、腫瘍内の TS、DPD、TP、OPRT を DTP 法を用いて mRNA 測定し、臨床病理学的因子、及び予後との関連性を検討した。【結果】DTP 法を用いることにより 92.5%の症例で測定可能であった。各酵素の mRNA と予後を検討すると TS、DPD、OPRT で差を認めなかったが、TP では 3 年生存率が高値群 19%、低値群 40%になり TP mRNA 高値群にて予後が有意に不良であった。予後について各酵素値と病理因子（組織型、リンパ節転移、リンパ管侵襲、静脈侵襲、漿膜浸潤の有無）にて多変量解析を行ったところ、TP mRNA は Hazard rate が 1.4891 で、リンパ管侵襲、静脈侵襲、漿膜浸潤の有無とともに有意な因子であった。【考察および結論】各酵素の mRNA と予後を検討すると TP mRNA 高値群では予後が有意に不良であった。多変量解析では TP mRNA は独立した予後因子であり、予後判定の指標となりうることが示唆された。</p> <p>以上、臨床的に極めて価値ある論文と認める。</p> <p>本要旨は当該論文が第二次審査に合格した後の 1 週間以内に学務部医学部大学院課へご提出下さい。(本学学会雑誌に公表) [学校教育法学位規則第 8 条]</p>			